



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

# ペットロスにおける悲嘆反応と支援のあり方 : ペットロスの実態とリーフレット作成

著者	梅木 太志
雑誌名	Human Welfare : HW
巻	10
号	1
ページ	162-163
発行年	2018-03-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00027448">http://hdl.handle.net/10236/00027448</a>

〔2016 年度 人間福祉学部優秀卒業研究賞・最優秀賞 要旨〕

## ペットロスにおける悲嘆反応と支援のあり方

### ーペットロスの実態とリーフレット作成ー

梅 木 太 志

近年ペットブームに伴うペットの家族化や日本人の人間関係の変化により、ペットが亡くなった時に大きな悲嘆やそれに伴う心身の反応が生じる「ペットロス」が社会問題となっている。瀬戸（1999）によると、ペットロスへの認識が低いわが国においては、ペットロスを軽く見たり嘲笑したり、あるいはまったくの無理解な態度を示すことによって、当事者の鬱状態を悪化させてしまう傾向があるという。人間と動物の関わりがこれまでも増して密接になってきている今日において、ペットロスによる悲嘆とそれに伴う心身の反応の及ぼす影響は大きい。しかしながら我が国におけるペットロスの認知度は未だ低く、ペットロスによる悲嘆反応とコーピングの関連に焦点を当てた論文は見受けられない。そこで本研究の目的は以下の通りとする。

- ①ペットロスにおける悲嘆反応とコーピングの関連について検討する。
- ②ペットロスの認知度の向上に繋がる策を検討する。

今回の研究は大学生に対するアンケート調査、獣医という医療現場から見たペットロスに関するインタビュー調査、動物病院に設置するペットロスリーフレットの作成という3部構成で進めた。

アンケート調査は関西の私立大学生を対象として行い、有効回答は213名で、有効回収率は99%であった。質問紙は、ペットロスに関する基本的な項目、ペットロス悲嘆反応尺度、ソーシャルサポート尺度、精神的回復力尺度、ペットロスコーピング尺度から構成された。

Nolen-Hoeksema & Larson (1999) は死別後の情動焦点型対処として6つの対処方略について検討し、「感情表出」「援助希求」「再評価」がうつ症状や心理的苦痛の軽減に関係するのに対し、「反すう」「回避」は重いうつ症状や心理的苦痛と

関係し、「気晴らし」は無関係だと述べている。しかしながら、ペットロス悲嘆反応尺度とペットロスコーピング尺度において、「自分の気持ちを人に話すようにした」や「他の人にサポートを求めた」といった、感情表出、援助希求の要素を含んだ「信仰心因子」は、悲嘆度が高く、ペットロス克服が比較的難しい傾向にあると考えられる「振り返り因子」「思い込み因子」との関連が見られた。これは、実際にペットロスに悩む飼い主が感情表出、援助希求をしたものの、周囲の理解を得ることができず、さらなる傷を負うことやペットロス克服の難化に繋がったのではないかと考えられる。また、「気晴らし因子」「死別受容・克服因子」は悲嘆度が比較的 low、ペットロス克服の方向に向かいやすい傾向にあると考えられる「成長因子」との関連が見られた。ペットを亡くした時は、亡くしたペットやそれが想起されるものから離れ、全く関係のないことでの気晴らしをする方が、ペットロスにおいては有効なコーピングである可能性がある。

インタビュー調査は、飼い主側だけでなく医療側から見たペットロスの実態を探り、今後の理想的なペットロスケアのあり方や、課題について明らかにすることを目的とし、大阪市内の動物病院の獣医の方と院長先生2名に行った。質問項目は、①獣医から見た飼い主の様子、②獣医としてのアプローチ、③獣医個人の考え方、グリーフについて、④今後のペットロスの展望、という大きく4項目から構成された。

インタビューの結果、ペットを家族として捉えるか否かで、同じ獣医療従事者である2名の間にもペットの捉え方には大きな考え方の相違があることが明らかとなった。飼い主と周囲の間だけでなく、同じ獣医療従事者の間でもペットの捉え方に相違が見られたことから、一般的なペッ

トの捉え方を統一することは難しいと考えられる。このペットの捉え方の相違により、ペットを家族のような存在と認識する飼い主と、動物として認識する周囲の人という両者の認識に隔たりが生じるため、ペットロスによる悲嘆とそれに伴う心身の反応が理解されにくい現状が生まれると予測される。また、ペットロスのケアの理想は、周囲が能動的に働きかけるものではなく、当事者がありのまま感情を表現できるような環境を整え、その感情を周囲の人が傾聴の姿勢を持って受け容れることであるとされた。

リーフレット作成は、動物病院への設置を想定し、ペットを失った時の対処や、周りの人がペットロスに悩んでいる時の関わり方を考える契機を作り、ペットロスの認知度を向上させることを目的として行った。作成にあたり、グリーンカウンセラー（臨床心理士）の米虫圭子氏にご協力頂いた。リーフレットは、①表紙、②ペットの存在に

ついて、③ペットを失った悲しみ、④悲しみにどう向き合うか、⑤小さなお子さんがいるご家族へ、⑥リーフレットの概要、の6つのセクションから構成された。リーフレットを通じ、ペットロスが自然な反応であり抑え込む必要のないものであるということを理解してもらうことで、一人で悩みを抱え込もうとしないようになることを期待したい。

本研究によって、ペットロスにおける悲嘆反応とコーピングの関係性が見出すことができ、それは死別悲嘆とコーピングの関係性とは異なることが明らかとなった。また、リーフレットは動物病院に設置するまでにとどまってしまう、医療現場や両者の実際の声や、リーフレット使用後の効果を測定できていない点が本研究の課題の1つであるが、今後ペットロスの認知度が向上し、理想的なペットロスケアへの環境作りに繋がる一助となることを期待したい。